



ノーサイド

禍害と被害を超えた論理の構築

(11)

～第V章 克服期

～今、事故と向き合って～

中村周平

今回は、修士論文の作成の過程で、過去の自分に思いを巡らせていきながら、徐々に被害者としての自分から解放されていく「気持ちの変遷」について触れていきたいと思います。あらためて事故と向き合っていく中で、今までとは違う視点で

「スポーツ事故」を考える事の必要性に気付かされていきます。そして、かつての指導者の方々ともう一度向き合う必要性を強く感じるようになっていきました。

前回までと同様に、「私へのインタビュー」で

交わされた会話の内容を手がかりに、当時の私の心境についても書き出していきたいと思います。

以下、表記は筆者=S、北村さん(インタビュー)=Iとする。

3 向き合うことで得た気づき

『『スポーツ事故』で修士論文をまとめていきたい』。決してすべての不安が払拭できたわけではありませんでしたが、このテーマをやりたいと思えるようになっていきました。しかし、論文を書き始めた当初は「学校における安全配慮の不備」「被害者だけが泣き寝入りしなければならない補償の問題」ばかりが論題にあがっていました。自ら「スポーツ事故」に加害者はいないと言いながらも、「被害者的感情」によるしがらみが私を支配していたのです。論文中でも自分の事故を「悲劇」と表現していました。事故からの時間の経過と共に私の心に染み込んでいった、この「被害者的感情」を振り払うことは容易ではありませんでした。その後、担当教員の方とのオフィスアワーの際、ある「出来事」がありました。

S:「団先生(担当教員の方)のオフィスアワーがあって、そのことを話したときに、すごく印象に残っているのが『当事者目線や被害者感情で情報発信をしてしまうと、受け手は無抵抗な受身感覚になってしまって、すべての問題がスルーされてしまったり、深く議論されないまま表に出てしまったり、最悪の場合どんどん離れていってしまう』っていう話をしてくださって。それがすごい自分の中でストンときたというか…ずっとなんなんやろって。同志社の講演のときも自分なりに想いを伝えたつもりやったんですけど、なかなか現役の子らに伝わらへんかったり。ずっと不安やったことが、そういう風に考えたらラグビーの問題だけじゃなくて、世の中にあるいろんなことが引きつけて考えることができて…」

I:「なるほどね」

S:「情報発信って大事やと思うんですけど、本当に事故を二度と起こしたくないと思ったときに、果

たしてその方法は正しかったのかなっていうか、もっといろんなことが考えられるんじゃないかなって。きっかけになったのが11月に試合を観に行ったことと、団先生のオフィスアワーと…でこのテーマをやろうと思った」

当事者やその家族から直接発信されるメッセージは、とてつもなく速いスピードで、しかも無条件に相手の心に伝わってしまいます。しかし、それは内容を深く理解されないまま伝わりとなり、同時に伝えた相手側を蚊帳の外に追いやってしまいます。これでは対立が深まるばかりで、事故を二度と繰り返さないということとは、かけ離れた場所で議論がなされてしまい…。完全に対立してしまえば、議論すらできなくなってしまうのです。事実、私も事故に対して十分な「原因究明」も「再発防止策」も打たれなかったことに対して、強い憤りを感じていました。その感情を直接ぶつけてしまう時期もありました。しかし、それによって本当なら同じ「当事者」として事故に向き合って欲しかった、かつての監督やコーチとの間に大きな溝を生んでしまいました。私がこれまでおこなってきたことは必ずしも、事故を減らしていくことにはつながらなかったのではないかと、強く感じています。クラスターでの発表の際、自分の事故を「悲劇」から「出来事」という表現に変えたことも、「被害者感情」を剥き出しにしていた過去の行動から思うことがあったことでした。先生方のアドバイスや、自分の過去を振り返ることによって事故と正面から向き合い、そして、今までとは異なった視点で「スポーツ事故」をみることができるようになっていきました。

4 「当事者」として向き合う

そして、自分の事故と向き合う中でもう一つ、大きな変化がありました。それは「かつての指導者の方々ともう一度話し合いたい」と思う気持ちが芽生え始めたことです。

I: 「団さんが言うとおりの、これは周平くんの問題だけじゃなくて、すごいこう…こういう事故の再発を予防する、そんなシステムを作っていこうと思ったら、痛い思いをした周平くんだけではどうしても作れへんっていうことや。そこに関わった人たちが介さないと、どうしてもできへんと。でもそこに加害者、被害者みたいなそういう構造があったら、きっと話し合いにならへんわけや」

S: 「そうです、そこまでいけないですよね」

I: 「なんかこう、感情的にさっき言った違和感みたいなもの。それは君の方にもあるやろうし、彼らにもきっとあるんやろうな」

S: 「きっとそうですね」

I: 「溝があるよね。そこを越えていくようなことを何かしないといけないと、それを周平くんはどういう風に理解したかっていうと、やっぱり自分が情報発信していかなって思うに思ったわけよね。そういう自省的な態度っていうのはすごいなって思うよね。でも、確かにそうよね、自分から働きかけないと、彼らになんか期待しようと思っても、どっか後ろめたさみたいななんもあるかわからへんし、こうやって、こういう出で立ち出てきた段階で、そのことに直接関わってへんにしても、なんて言うのかな…なんかあるかもわからへんね、隔たりが。ただ、周平くんのほうからなにか情報発信せなあかんのかもしれへんね。でもそれはただ単に、被害者だとか、弱者だとか目線であってはいつまでもそういう溝は埋まらへんっていう話やな。そうかもわからへん。なるほどそう考えると大きいね。この問題は。それをどういうふうにしていったらいいのかね？ どういう目線が必要なんやろうな？」

S: 「僕は今まで、監督達、学校の人達に持ってきた姿勢っていうのは、どうしても反省を求めてしまう姿勢であるとか、その批判的な視点ですよ、なんでそうなったんですかっていう。でも、それをしてきたから、やっぱり変な違和感であるとか、お互いの人間関係の溝を開いてしまったという、やっとな今、自分の中でそういう気持ち芽生えてきているので、それに対してどうしたらいいのかって思った時に、一緒に事故の経験を活かすると

どうか、もう一度具体的などことを言えばもう一度監督らと、話がしたいですね。で、そこに自分の思いは伝えたいと思います。『僕はこう思ってたんです』っていう。今までやったら溝はなかなか縮まらないと思うんですけど、自分からそう全部話したり、こっちから歩み寄っていくことで向こうから歩み寄ってくれはる、そんな機会を考えたというか。もし考えてもらえたら、もしかしたら、もっと情報発信がしていけるっていうことを分かってもらいたい。(中略)僕の事故が起きたとき、補償のこともあったんですけど、事故が起きた高校が、次の年、当たり前のように全国大会を目指す強豪校っていう形だけでいってしまったので、そのことに関して事故が起きた高校なんやから、そのことに対して外に情報発信してくれへんのかなっていう。ただでさえ怪我の多いスポーツで、常に情報発信をしていかないとすごく記憶が薄れてしまったりするのに、事故が起きて…でもそれは不慮の事故やったってことで、なかなか見てもらえなかったっていう思いがあったので。一緒に学校側もこういう事故があったっていう、学校関係者の中で、学校の中で起きるスポーツだけじゃないすべての事故を話し合う場で情報発信していってもらえたら…。難しいかも知れないですけど、起きたって現実と一緒に考えてもらえることにつながるのかなって。そういうところに行って僕が発信するよりも、やっぱり学校の校長先生なり、教職員の方が発信してくださることの意味合いというか、周りの人に与える印象とか全部変わってくると思うんですよ」

I: 「そこらへん(監督やコーチ)の関係も修復したいって思いはあるの？」

S: 「あります。当時、自分の生活の忙しさとか、事故に対する不信感が芽生え始めたころに、もう少しお互いに話し合うことができたなら、何か方向性が変わっていたというか。自分が知らない部分があるんじゃないかなって、もしかしたらその人も保護者の対応であるとか事故の処理で大変やった時期に、いろいろ言われて…今となってはわからないことなので、もし今度話す機会があったときに自分の方から話してみようかな。『僕はこ

う思ってたんですけど、どうやったんですか』ってことがぶっちゃけて話したら一番いいなって思うんですけど」

事故直後は、自分のことで精神的に追い込まれてしまい、相手の立場や気持ちを察したり、考えたりする、精神的な面での余裕がありませんでした。「なぜしっかり事故を調べてくれないのか」「どうして正面から向きあってくれないのか」と。しかし、もしかしたら、相手も同じように大変だったかも知れない、事故と向き合いにくい何かがあったのかも知れない。自らの発言からもわかるように、今になってそのことを考えるようになりました。できることなら、事故当時の互いの気持ちや考えを話し合い、崩れてしまった関係を修繕していきたい。そして、これまでの私の経験と監督やコーチの方々の経験を共有し、そのことを外に対して情報発信していくことの必要性を分かってもらいたい。互いが歩み寄ること、それが事故を繰り返さないための取り組みへのスタート地点ではないか。事故から8年の歳月を要してしまいましたが、この取り組みは「私だからこそ」大きな意味があると考えました。